

研究主題

自分の学びや学び方を見つめながら、主体的に取り組むことができる児童の育成 ～「見通し」「振り返り」の場を工夫して～

1 主題設定の理由

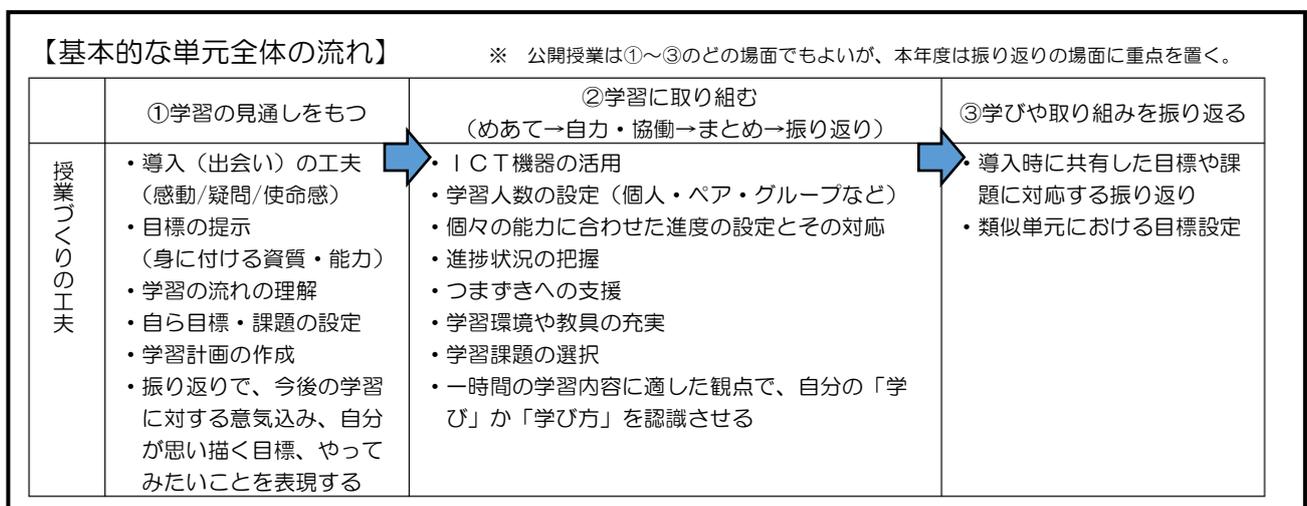
昨年度は、学習の見通しをもつ導入場面や毎時間もしくは単元の終末に自分の学びを見つめ、次に生かそうとすることができる振り返りの場を工夫することで、「目標や課題をもち、自分の学びを見つめられる授業づくり」を目指し、実践に取り組んだ。

目標や学習問題を達成・解決するための課題について、児童と対話しながら考えたり、ともに学習計画を立てたりすることで、見通しがもちやすくなり、単元のめあてや身に付けるべき資質・能力を意識しやすい授業を展開することができた。

また、児童が自分の学びを見つめられるよう、観点を明確に提示したり、言語化を促す問い掛けを工夫したりすることで、自身が学んだことを基にして、次の課題に生かそうとする児童の姿が見られた。

一方で、こうした学習スタイルの定着を図るため、今後も継続した取り組みが必要であることや、何を観点にして振り返るとよいのかが分かりづらく、振り返りの観点が曖昧になってしまうということが課題として挙げた。年度末の努力点全体会では、授業の内容に応じて、「学び（学習内容）」と「学び方」を使い分けながら観点として示すとよいのではないかという意見があった。「主体的に取り組む姿」の一つに、「自らの学習を調整しようとする姿」がある。試行錯誤したり、自らの意志で選択したりしながら学習に取り組むためには、「何を勉強しているのか」、「自分がどう取り組んでいるのか」ということを認識することが必要である。

そこで、本年度は、研究主題を「自分の学びや学び方を見つめながら、主体的に取り組むことができる児童の育成～『見通し』『振り返り』を通して～」とし、取り組みを継続していくとともに、振り返りの観点をより明確に提示し、児童が自分自身で「学び」に気付いたり、「学び方」を認識したりすることができるようにすることで、主体的に学習に取り組む児童の育成を目指す。



2 本校における共通認識

① 目標と課題

- ・ 目標…学習後に到達する姿や成果（物）

※ 児童が理解できる範囲で、明確かつ指導事項に触れているものが好ましい
例：「パンフレットを作ろう」△ 「読み手に分かりやすく伝わるパンフレットを作ろう」○

- ・ 課題…その目標を達成するためにすべき事柄

※ 読み手に分かりやすいパンフレットにするための課題例
図や写真の活用 興味をもたせる見出しの表現の工夫 自分なりの考えや理由を述べる
レイアウトの工夫 インタビューや資料集めで根拠を明確にする など
※ こうした「課題」を児童自身が見出したり、選択したりしながら、自分の学びを創りあげていくことが望ましい。

- ・ 「目標をもつ」＝何をする学習なのか、何を目指しているのか全員が理解する
- ・ 「課題をもつ」＝「そのために何をすべきか」を発達段階に応じて設定する
- ・ 「教科書に書いてあるから○○するよ」や「今日は□□をします」といった導入は控え、児童の声を学習の流れにうまく取り込めるようにする。そのためには、児童の興味や関心を高める導入、問い掛け、教材提示の工夫が重要になる。「与えられ、言われた学習」という印象を児童に極力与えない授業づくりを心掛ける。

② 一時間の授業の基本的な流れ

めあて	その授業で達成したり、身に付けたり、取り組んだりする事柄を、児童の実態に合った言葉で提示する。単元の目標を達成するための課題として捉えてよい。単元導入時の「見通しをもとう」「課題を考えよう」や単元末の「振り返ろう」などのように課題そのものではないめあてもある。 (活動型：「～しよう」 疑問型：「～はどうすればよい?」) 既習事項を活用する授業の場合、児童自ら目標を選択・設定することもできる。
自力・協働	学習内容に合わせ、「自力か協働かどちらかで」「自力と協働の時間配分を決めて」「自力と協働を繰り返しながら」学習を展開する。どの学習展開においても学級全体で共有する時間を設けるのが好ましい。 自分に合った課題の選択、取り組む課題の順番決め、方法の選択などを委ねることもできる。
まとめ	めあてと直結する内容で教師が提示したり、児童から引き出したり、個々の学びに合わせて個々で考えさせたりする。 活動型めあて：活動を通して見出すことができた学びやポイントについて 疑問型めあて：その疑問に対する答えについて
振り返り	(5) 以降参照

③ 「主体的に学習に取り組む」とは、なぜ「振り返り」が必要なのか

- ・ 知識・技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力を身に付けたりすることに向けた粘り強い取り組みを行おうとする
- ・ 粘り強い取り組みの中で、自らの学習を調整しようとする

「主体的に学習に取り組む態度」は、この二つの側面から評価することが求められている（文部科学省 国立教育政策 研究所教育課程研究センター『学習評価の在り方ハンドブック』より）。挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉えた評価ではなく、意思的な側面を捉える必要がある。しかし、教師が児童の意思を見取るのは、気持ちや思考を読み取るのと同じで非常に困難である。また、児童が粘り強い取り組みをするためには、「何を勉

強しているのか」ということが分かっていないといけない。自らの学習を調整するためには、「自分がどう取り組んでいるのか」を認識していないとできない。つまり、教師が児童の意思的な側面を捉えられるよう、また、児童が主体的に学習に取り組めるようにするために、児童の「振り返る力」を養うことが必要なのである。

④ 「主体的に学習に取り組む態度」の具体的な姿

「粘り強さ」「自己調整」という視点で考えられる姿は、以下の通りである。

- ・自分のめあてに向かって最後まで取り組んでいる
- ・自分が理解するだけでなく、人に伝えようとしている
- ・教師や友達の力を借りて乗り越えようとしている
- ・「簡単にできる」という自分の状況に満足せず、より高い学習レベルに取り組もうとしている
- ・余った時間も、その時の学習に沿った活動に自ら取り組んでいる
- ・別の方法で挑戦しようとする
- ・自分の考えや計画を見直している
- ・新しいアイデアを出している

この内容が全てではない。最後まで懸命に取り組んでいても、めあてに合致していないと指導事項を身に付けられないし、人の力を借りて乗り越えていても、理解していなければ、粘り強く取り組めたとは言いがたい。このように、学習内容や児童の発達段階によって、多様な姿が挙がるだろう。そこで今年度、東海小として、「主体的に学習に取り組んでいると言える具体的な姿」を実際の授業を通して、集約していく。

⑤ 振り返りの観点

「学び」（学習内容・各教科の指導事項に関わる内容）と「学び方」（取り組み方・意思的な側面）とで観点を使い分けながら、振り返りを行う。「学び方」を振り返る際、キャリア教育で育成する力として示されている8項目を観点とし、本校における教育活動全てにおいて、自分の成長を振り返る際に活用する。

観点	提示内容	説明	評価	
学び	【指導事項に関わる内容について】 分かったこと、できたこと、自分の考えなど		<input type="checkbox"/> 知技 <input type="checkbox"/> 思表判 <input type="checkbox"/> 主	
学び方	人間関係形成・社会形成能力 (他者と関わる)	つたえる力  つながる力 	<input type="checkbox"/> 主	
	自己理解・自己管理能力 (自分を認め、自分の力を高める)	むきあう力  やりぬく力 		
	課題対応能力 (課題を見付け解決する)	みつける力・しらべる力  みとおす力 		
	キャリアプランニング能力	えらぶ力・決める力 		
		つたえる力  つながる力 		自分の考えや主張を正しく伝えたり、調べたことを効果的に表現したりする力
		つながる力  むきあう力 		学びを深めたり、目標を達成したりするために、話し合ったり、自分の能力を發揮して役割を果たしたり、他者と助け合ったりする力

(どんな経験を歩むか決める)	ふりかえる力 	自分の行動や判断を客観的に捉え、自分の考え、分かったこと、分からないことに気付いたり、そこから、自分の考えや行動をよりよくしたりしていこうとする力
----------------	---	---

観点の提示については、学習内容に応じて教師が指定してもよいし、「発揮できた(高まった)」と思える力を児童に選ばせてもよい。振り返りが定着していないうちは、「学び」を主な観点にするとよい。その際、「なぜ発揮できた(高まった)と思うか」と、理由の記述を習慣付けることで、③で述べた「意思的な側面」を見取りやすくなると考える。

⑥ 取り組みの浸透

- ・ 保護者や児童への周知

4/11～25 児童向けに今年度の努力点の取り組みを説明

4/25 学級懇談会で保護者向けに説明

年間 「努力点ポスター」の教室掲示、「学校だより」で授業の紹介

2/19・20 学級懇談会で努力点の取り組みの成果を報告

- ・ 活動場面に、児童が親しみやすい名前を付ける

「学びたいム」(学習の見通し)

「えらびたいム」(課題選択)

「ふりかえりたいム」(振り返り)

3 検証の方法

主体的なの各段階における児童の記述・様子・成果物から検証を行う。

4 研究の計画

主幹・教務主任・☆推進委員長・◎部会長

① 研究組織



② 公開授業について

- ・ 12月までに一人1回(各部会で1・2学期を分けて)公開授業を行う。公開授業以外にも、年間を通して継続的に実践を行い、子どもの変容を掴む。
- ・ 授業実践の際、「実践報告書」を準備し、各部会での事前検討会で、手立てについて検討する。また、実践後に事後検討会を開き、手立ての効果や課題を振り返る。
- ・ 公開授業は、1の【基本的な単元全体の流れ】で示した①～③のどの場面でもよい。ただ、どの場面においても、「振り返り」の場面をしっかりと取り入れることで、「振り返り」の方法や観点の示し方、授業への取り入れ方などを職員で共有したり、検討したりできるようにする。

③ その他

- ・ 「ナゴヤ学びのコンパス」に関連する現職教育を行い、指導方法などを学ぶ。
- ・ 公開授業の成果と課題を実践報告書にまとめ、中間・最終報告会で共有する。